

プミボン前国王陛下への弔問

辻本 浩一郎

プミボン前国王陛下の国葬が10月25日～29日に執り行われ、国葬中には、王宮前広場周辺に15万人が参列しました。

崩御されてから行われてきた王宮におけるプミボン前国王陛下への弔問では、一般の弔問者は330日間で1,140万人、香典は8億5,100万バーツ（約28億7,100万円）に上ったとのこと。御生前の国家や国民に対する思いやり溢れる御活動とその御貢献、そしてその国民のプミボン前国王陛下への敬愛や尊敬の思いの表れと言えるでしょう。

実質、立憲君主制であるにも関わらず軍事政権が長く続いた国家の中において、司法や行政、軍部の調停役としての権威強化に努められ、また、自ら指導されてこられた数々の「王室プロジェクト」では地方経済活性化に尽力され、あくまでも国民に近いお立場を取られてこられました。精力的に行われてこられた地方視察の際も、風雨の中をも歩かれ、地図と鉛筆、カメラを片手にそこに住む人々のためご熱心に調査をされ、且つ人々の輪の中に積極的に入っていかれたなど、その御姿はあまりにも有名です。

<筆者も弔問へ>

国葬前に私もプミボン前国王陛下の弔問に行くことができました。ご遺体は、王宮内のドゥシット・マハ・プラサート宮殿に安置されおり、崩御後15日目の儀式が終わったのを受け、一般開放されていました。

フアランポン中央駅から王宮まで運行されているシャトルバスを乗り継ぎ、王宮に向かいます。途中、身分証明のゲートがあり、外国人はパスポート提示の必要がありました。開放直後は、黒い服を身にまとった大勢の人で溢れ、長蛇の列。宮殿に入るまでに長時間かかりましたが、その日は平日の夕刻であったためか、ほとんど待つことなく、王宮の入り口まで進むことができました（先日の一般開放終了直前も、最後の御別れをするために、開放直後以上の弔問者だったようです）。

王宮まで、隣接する王宮前広場、通称サナムルアン沿いを歩きますが、10月25日から5日間に渡って営まれる国葬場の建設が完成間近でした。火葬壇は須弥山をイメージしたもので、基部が60メートル四方、高さが50.49メートルに達します。守護神や神獣などの彫像70体以上が配され、金色に輝く壮麗なものとなります。棺を王宮から火葬壇に運びますが、高さ11メートル、長さ18メートルの豪華装飾の山車のような車です。216人で引くことになっています。220年以上前、現チャクリ王朝初代のラマ1世時代に作られたものが、修理を重ねながら今も使われているとのこと。

王宮の入口で4列に整列します。軍人や警察官、王室庁のスタッフによる丁寧な指示や誘導がありました。救急や水・軽食提供、分別ゴミ収集のボランティアの方々のお働きぶりも献身的で、そこからもプミボン前国王陛下がいかに敬愛と尊敬を集めておられたかが伺えました。

弔問4列の列がドゥシット・マハ・プラサート宮殿に近づくにつれ、4列が2列となり、宮殿敷地内に入ると、僧侶がお経を唱え、周りでは政府関係者や企業関係者が合掌をしていました。企業については事前登録をすれば、列席することができるとのことでした。一般弔問客は、靴を脱ぎ、再度2列で宮殿入口に待機。その後、スタッフの指示に従い、室内へ。宮殿内には、台座の上に宝石がちりばめられた黄金の座棺が置かれています。座棺は王族などの葬儀に伝統的に使われてきましたが、近年、ご遺体は別の棺に安置されています。ゆっくりと黄金の座棺に近づき、スタッフの合図で一同床に腰を下ろし正座をし、合掌をしながら一礼。その後、すみやかに立ち、沈黙を保ったまま室内より出て終了となります。

表へ出ると、タンブン（寄付）を募っていましたが、これは国葬への寄付です。全ての人が寄付をしていました。宮殿出口ではスタッフがプミボン前国王陛下の肖像写真を配布しており、写真を受取ります。皆、プミボン前国王陛下の思い出話等しながら、帰路へつきます。王宮周辺は交通規制をしており、また無料シャトルバスが行き交っているため、帰りも非常にスムーズでした。

プミボン前国王陛下への想いが一つになり、そして、各人が各々の役割を徹底、協力しながら作り上げている、とてもよくできたシステムであり、そこには、随所に渡り、プミボン前国王陛下への敬愛が垣間見られました。